讃岐国府ミステリーハンターの参加活動

讃岐国府跡探索事業ボランティア調査員

（2009 年度～ 2012 年度）

2013 年 3 月

香川県埋蔵文化財センター

讃岐国府跡探索事業４カ年を終えて
県民ボランティアとともに

香川県埋蔵文化財センター所長　　藤好史郎

讃岐国府跡探索事業は、讃岐国府の実態を解明するということを目的としますが、今回の活動では、ボランティアの方々との共同作業という特徴があります。通常の普及活動は、事業の調査結果や成果を公表するものが中心であり、文化財の価値や面白さの共有という面では、やや不十分であると感じていました。そこで、自由に意見を言える立場のボランティアとして、一般の方々に実際の作業に参加していただければ、「文化財の価値や面白さを広く共有できるのではないか」と企画したのが讃岐国府跡探索事業です。

この事業には発掘調査だけでなく、地名の聞き取り調査、微地形の記録、水利慣行の調査など、ボランティアの数を活かせる手法も盛り込み、讃岐国府の実態に迫る総合調査として計画しました。実際、ボランティアの方々との活動調査では、参加されたボランティアの熱意、様々なキャリアが事業を進める上で、大きな力となっています。当初の目的であった「発信」という面でも面白さの共有を通して、これまでとは異なる次元で達成されつつあります。

今年度、国府の中心施設の一部を確認できました。調査区が狭いため、施設の性格の確定までには至っていないものの、推測の域を出なかった讃岐国府の中心部の特定をボランティアの方々とともに達成できたことは、讃岐国府跡の今後の保存活用に向けての大きな前進と考えています。

2013 年 2 月

★讃岐国府跡探索事業（事業担当：香川県埋蔵文化財センター）

讃岐国府跡の国庁域を確認し、史跡指定を含めた今後の保護措置に係わる検討材料を得、また、地域住民や県民（ボランティア等）とともに讃岐国府跡の発掘調査や同遺跡を活用した広報等の活動を実施して埋蔵文化財保護の普及・啓発の拡充を行う。

事業年度は 2009 年度から 2012 年度。

４ヵ年事業期間のセンター所長は、大山眞充（2009 年度・2010 年度）、
藤好史郎（2011 年度・2012 年度）。

現場担当職員（文化財専門員）は、

地名・地形・発掘＝木下晴一（2009 年度）、蔵本晋司（2009 年度）、
松本和彦（2009 年度）、宮﨑哲治（2010 年度）、西村尋文（2011 年度）、
佐藤竜馬（2011 年度）、森下友子（2011 年度）、信里芳紀（2012 年度）

広報＝乗松真也（2009 年度・2010 年度）、宮﨑哲治（2011 年度・2012 年度）

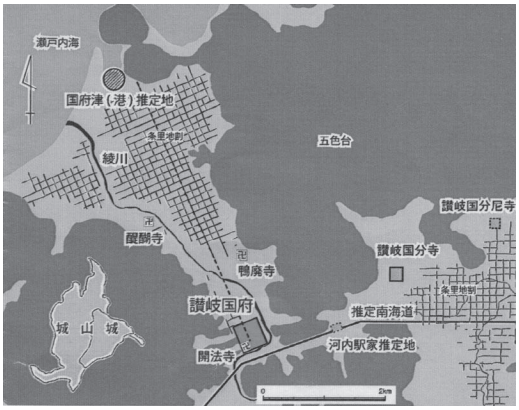
全体調整＝西岡達哉（2009 年度・2010 年度）、森格也（2011 年度・2012 年度）

城山綾北展望台から東・北方面の

★讃岐国府跡

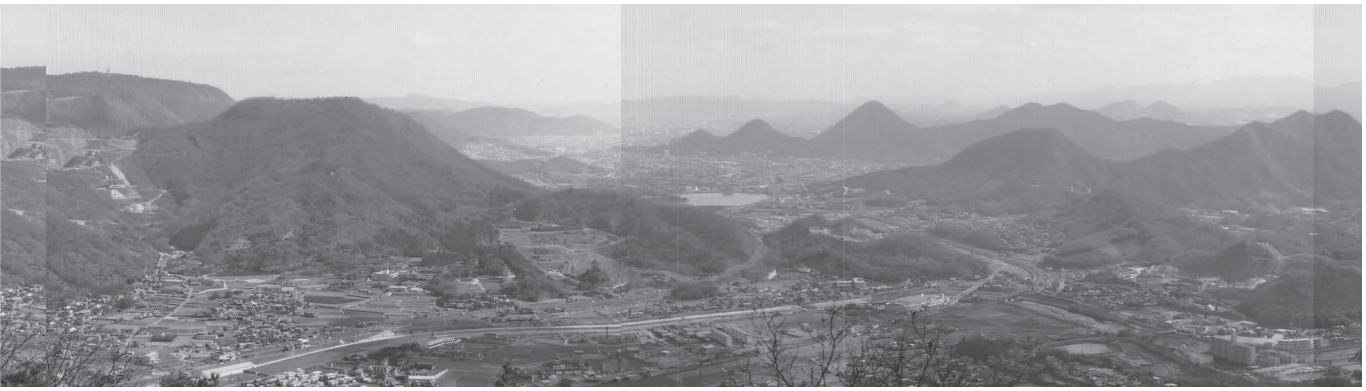
奈良時代から平安時代にかけて国司が政務を執る施設（国庁）が置かれた。和名類聚抄（935 年頃編纂）には「国府阿野郡にあり」と記されており、全国では 68 国が記載されている。国庁の基本配置は正殿　東脇殿　西脇殿　門などから成る。1964 年の近江国府発掘以降、国指定史跡となったのは、68 国のうち 14 国。坂出市府中町本村地区の綾川を東限・南限とした東西 600㍍、南北 700㍍範囲を「埋蔵文化財包蔵地」として遺跡台帳に登載。この範囲内には開法寺塔跡・寺域があり、886 年～ 890 年まで国司で 4 年間赴任した菅原道真（845 年～ 903 年）が菅家文草に「開法寺は府衙の西に在り」（210 番）と注記している。発掘調査は 1976 年の坂出市教育委員会の第 1 次調査からスタート、以降、2 次～ 8 次が県教育委員会、9 次～ 26 次が坂出市教育委員会、27 次調査から 2012 年度の第 30 次までは埋蔵文化財センターが事業担当している。

発掘開始から 36 年経過、700 年代（8 世紀）から 1200 年代（13 世紀）まで 500 年近く続いた国府跡だけに輻輳する手掛かりが多く、施設中枢ゾーンに近付いているものの、いまだに奈良時代（710 年～ 794 年）創建期の国庁跡建物が解明されていない。「開法寺は府衙の西に在り」、裏返すと「府衙は開法寺の東に在り」これが今回の讃岐国府ミステリーハンターの要でもある。



讃岐国府周辺の歴史的環境

配置図想定



綾北平野を望む・眼下に綾川、国府跡

讃岐国府ミステリーハンター概要（34 人）

2012 年 12 月現在、ボランティア連絡網記載 34 人のうち、2009 年 4 月公募の 1 期生は 22 人、2011 年 6 月公募の 2 期生が 12 人。

活動日は 2009 年度と 2010 年度が水･木･土曜日、2011 年度と 2012 年度が火･水･木・土曜日。発掘活動は毎年 11 月から翌年 2 月末。発掘活動中は火曜から土曜まで週 5 日。時間は午前 9 時から午後 4 時。

★参加者内訳は、男性 25 人、女性 9 人。（男性 7 割、女性 3 割）

★年代構成（2012 年 12 月現在）は、80 歳代が 1 人、70 歳代が 9 人、60 歳代が 21 人、50 歳代が 2 人、30 歳代 1 人。平均年齢は 66 歳となり、65 歳以上が半数を占め、現役を卒業した人が多くを占める構成が特徴。特に 84 歳の齋藤茂さんは、大野原町から軽トラで 1 時間近くかけて週に 1 ～ 2 回は参加、若手でも重い土のう運びなど、汗を流すメンバーとともに作業、長年まとめた資料の話をするなどボランティアの印象に残り、元気づけられた。

★住まい構成は、高松市在住が全体の 4 割を占め 14 人。続いて地元の坂出市が 8 人で全体の 2 ・ 5 割（ 4 人に 1 人）。以下さぬき市 2 人、丸亀市 2 人、観音寺市 2 人、三豊市 1 人、善通寺市 1 人、多度津町 1 人、まんのう町 1 人、宇多津町 1 人、三木町 1 人。

アンケート概要

34 人のうち 29 人が回答を寄せた。回収率は 85％。提出期間は 2012 年 11 月 7 日～ 12 月 1 日。

公募は何で知ったか！では

一番多いのは新聞情報、続いて県資料、次いで知人らの情報から内容を知ったなど。紙媒体、会話からの情報が多く、ホームページから情報入手したのは２人だけ。

応募理由！では

歴史や考古学に興味があったのはもちろんながら、「発掘」という作業に興味を惹かれたようだ。ミステリーというネーミングにつられた人、また、現役退職など期にタイミングが合ったことも一因。夫婦での参加も１組あった。

センターまでの交通手段・時間は！

JR 利用は２人のみ。ほかは自動車（バイク含む）。

移動時間は車で 30 分以内が 23 人、30 分～１時間が４人。

★センターへの JR 最寄り駅は予讃線の讃岐府中駅。駅からセンターまでは約 500 ㍍の徒歩。駐車場は 60 台確保

坂出市府中町本村のセンター建物

讃岐国府跡駅に改名の声も

参加する時間曜日の工面は！

参加日や曜日を優先してスケジュールを決めているのが大多数。行ける時に行くというスタンスもある。また、現役組は土曜の参加がほとんど。

月平均何回程度の参加か！では

月に３回以内参加が 10 人、６回以内が 10 人、７～ 10 回程度が６人、２日に１回程度参加する人も３人を数える。

発掘作業に関しては、現場担当職員以外に３～４人は最低限必要。「今日は多いなぁ」という日は 10 人を超えた日で、水曜日が意外と多かった。アンケートにはないが、午前と午後に分けると１日通しで作業する人は、午前の半数いれば良いほうだろう。

★ 09：00 ～ 16：00 まで作業。途中、10：00 過ぎ頃休憩、12：00 ～ 13：00 昼休み、14:00 頃休憩、ほか小休憩。昼食は近くのうどん屋、中華、喫茶店か弁当持参、自宅など。

朝日を浴びて

さぶいなぁ

家族や知人に活動内容をどのように話しているか！では

「楽しかったことや教わったこと」、「その日にあったこと」、「見つけた遺物」などについて話しているようだが、細かい説明までは相手に通じていないようだ。だが、センターの活動を話すことで関心を持つ人も広がりつつある。でもなかには、「話さない」という人も。

ラジオ体操で柔軟

作業前に説明

あなたの活動が家族や知人からどのように言われているか！については

理解あることばは

「いいんじゃない」、「好きだなぁ」、「ようやるなぁ」、「楽しんでいますね」
「好きなことだからイイんでないの」、「うらやましい」、「元気の源か」

ちょっと皮肉ぽいことばは

「何の報酬もなくよくやるなぁ」、「ゼニにもならないやん」、
「ただではなかろう、弁当代くらいはでるんやろ」、「暇やね」、
「好きでないとできないね」、「家でゴロゴロされても困る」、
「ようやるなぁ、何が楽しいん」、「家でも同様にしてね」、
「珍しい、変わったことしてるね」
と言われることも。皮肉ぽさが増しているのが現状。

何を楽しみに出かけてますか！では

「新しい発見、新しい事物・体験」、「知らない世界との出会い」、「同じ仲間との交流」、「いろんな話を聞けること」など、今までの人生経験では得られなかった「いろんな物の見方」に触れる楽しさがにじんでいる。

また、作業のなかでは「国庁建物のイメージ」、「人々の生活の変遷」、「さまざまな調査手法・手順を知る」、「土のなかから出てくる瓦・土器」など初めて取り組む作業自体にも「ワクワク感」がそれぞれに秘かな楽しみとなっている。

掘り出した途端

深い柱穴跡を掘る

考古学や史学など何時頃から関心がありましたか！については

２人に１人（全体の５割以上）が退職後やこのボランティア活動に参加してから関心を深めた。また、子供や学生の頃の体験がキッカケとなったのは、３人に１人の割合。

考古学や古いことに関してはどのように考えていたか！については

４人に１人が活動に参加するまでは「今の生活のみで何も考えていなかった」、「過去には興味なかった」など答えている。一方、「温故知新」、「過去を学んで未来を考える」、「現代は古代からの延長線上」、「先人の考えを思い、今を生活する」など歴史を知る大切さに思いを深めている人も多い。また、発掘ニュース、新聞記事の楽しみのほか、京都･奈良、近世の城などだけでない古代へ至る「歴史の幅」に関心を増している面も覗える。

ミステリーハンター以外での参加グループは！

国分寺資料館友の会、史跡研究会、山登り、病院ボランティア、香大考古学セミナー、豊中歴史同好会、奈良古代文化研究会、瀬戸内海塾、高松大学講座、四国新聞講座、讃岐ジオサイト、香川県文化財保護協会、満濃公園自然生態園インタープリター、給食ボランティア、放送大学オープン歴史講座、瀬戸内海歴史民俗資料館、図書館サポーター、全国式内社顕彰会、日本家系図学会、多度津資料館ボランティア、長寿大学など数多くの活動に参加している。もちろんこれ以外にも、自治会、神社・寺、老人クラブ、公民館活動、福祉関係ＮＰＯなど地元貢献も果たしている。

雨の翌日コンパネはずし

碑の西側で作業

今回のボランティアの良さはどこにある！については

「素人が参加できる」、「専門家に見方、考え方、調べ方など知識を教えてもらえる」、「実際に遺物に触れる貴重な体験ができる」、「発掘活動が水洗いまで一貫してできる」、など活動そのものの喜びがあるようだ。また、参加者同士の交流、ふれあい、勉強など今までとは違った活動が互いの刺激になっているかも。反面、「自分の都合に合わせた参加」、「ボケ防止」、「気楽にできる」などの声も当然あった。

あなたの生き方に変化はでましたか！では

「地域の歴史に興味を持ち、地域に愛着が生まれた」、「目の前のものはすべて歴史があり、過去の物語の上にあるんだ」、「歴史に親しみを感じ、本で調べ、現地に行ったりできる」、「心を満足させてくれる」、「想像する楽しみがある」など物事を見る視点が変化、充実した面も覗え、「冥途へのイイ土産ができた」、「アチラでみちざねさんに会ったら報告したい」との声も。

テレビ、新聞取材、イベントなど人前ではどう対処されますか！では

「苦手なので近寄らない」、「さりげなく後ろに」、「ひたすら逃げる」、「話したくない」など３人に１人は苦手のようだ。反面、理解者を増すため「丁寧、親切に対応」、「わかりやすく、コンパクトに熱心に伝える」、「まちおこしの一環になれば」、「多くの人に知っていただきたい」という気持ちに揺り動かされる一面もある。また、放送時間を知人に宣伝したり、新聞の連載記事をスクラップ、テレビ DVD 録画するなどのほか、知人から「見たよ」と逆に言われ、それが生活の刺激になっている面もある。

マスコミ取材は笑顔で

活動でこれはイイなと思ったことは！

担当する職員（文化財専門員）から直接指導が受けられたことや専門家の考え方、判断、知識をその場で聞け、疑問点に気持ち良く答えていただけた活動は、「単なるセンター業務手助けと思っていた」参加者には、ありがたい時間でもあった。また、まち歩き、南海道、古墳めぐり、研修旅行、現場見学会などその都度、内容が資料作成・添付され、専門職員が現場でみる視点を疑似体験できること、さらに職員とともにセンターの発行している「研究紀要」に掲載するまでテーマを絞って寄稿したグループ、一般への報告会で活動成果を発表したグループ、まち歩きのガイド役を担ったグループなど、一人ひとりの自信につながる活動も展開した。

市民グループが見学に

センターへの要望は！について

センター職員に感謝のことばが多く寄せられているのはもちろん、引き続いた活動を望む声も多い。「この事業のように専門員の指導のもと、同好の士が組織化されて活動する場を継続」、「事業を目にみえる形で周知し、県当局やメディアなどへの働きかけを」、「国府探索は今後も続けよう」、「正殿がでたら次は国司館、河内駅を」、「条里地割や南海道、松山津、城山古代山城などテーマ別の追求も続けたい」と先の長い国府域のあらまし解明の一翼を担う声もある。さらに「県市町の活動行事を一体把握した広報拠点組織に」、「県民が地域への愛着心を向上させる地域社会のシンボルに」、「考古学ファンに刺激を与える企画・発想の要に」など県の埋蔵文化財センターとして名実ともに県民の声に応える組織づくりを望む声もある。

また、いまひとつ頑張って欲しいという声では「ＰＲが周辺住民に集中して、県民への浸透力がなくセンターの存在感が弱い」、「担当の専門員が毎年代わりすぎ」、「収蔵庫にある数多い遺物の再分析を」、「今までの調査報告書や紀要、年報など出版物や図書類の資料再精査を進めていこう」、「一般にも資料開放や出版物の手に入りやすい環境を」「小・中学校教育の場やまち歩きに積極的なボランティアの活用を」などセンター専門職としての能力発揮はもちろん、行政マンとして県民の文化向上を担うさらなる仕掛け・工夫・発案を求める。「ボランティアとしてもさまざまな人生経験の能力を各人が発揮できる。専門家でない素人の目から見る活動、行政を支援できるボランティア活動の場を担いたい」という声も聞かれた。（文責・池浦）

発掘１（現地での作業）

ミステリーハンターが楽しみにしている現地での発掘作業。国府跡探索を目指す４ヵ年事業（2009 年度～ 2012 年度）がスタートしてからは、埋文センターが事業担当となり、作業を進めている。発掘対象地はすべて民間の田畑。地権者に交渉し、理解･承諾を得てからの着手となる。夏前から交渉を進め、秋の米作収穫後、着手、翌年春の３月までには元の状態に戻して完了となる。

初回 2009 年度の第 27 次はエリア北側の地域で東西 15㍍、幅３㍍のトレンチ。この狭いトレンチでは約 60 基に及ぶ 30㌢程度の多くの柱穴跡群が出た。2010 年度 28 次は馬さし大貫沿いに東西 11㍍、南北方向 20㍍、幅 150㌢のクロスするトレンチ。ここも狭いトレンチだが、クロス部分からは 50 ～ 60㌢大の石が３個並べた状態で出現、交差南北側は拳大の礫が敷かれていた。2011 年度の 29 次調査は北エリアから一転、国司庁碑が建つ南エリアに発掘地点を変え、これまでとは違った大規模なトレンチを手掛け、５個所でトレンチを掘り進んだ。この 29 次では古代瓦が多量に出土、古代役人が身につける帯の石製飾り具、深さ１・5㍍程の地中から水路の杭あと、そして東西南北の正方位に向く梁間３間、桁行７間、延べ床 60 平方㍍の大型掘立柱建物の柱穴跡が出た。

2012 年度の第 30 次調査は、前年の 29 次で正方位大型掘立柱建物跡が出た隣り、南側の田んぼ。開法寺塔跡に向かって標高も田んぼ１枚づつ 30㌢ほど上がっていく地形。段丘崖といわれる所まではあと 50㍍程の所。トレンチからは条理型地割に沿った柱穴跡や瓦ぶき掘立柱の塀跡などが出ており、2013 年２月７日メディア各紙は「讃岐の古代県庁跡、讃岐国府中枢エリア姿現す」と報道、２月９日（地元対象）、２月 10 日（一般対象）の発掘調査現地説明会にはあわせて 1000 人近い人たちが足を運び、関心の高さを示した。

「発掘の後、公共建物や新しい道路などが予定されている所と違い、国府跡を探し出すための事業。発掘場所も国府衰退の後、田畑となり、それがいまだに田んぼで続いている場所です」（文化財専門員）。

不思議なことに 2012 年７月に実施した周辺の表面遺物採取活動の時、１枚西側の田んぼから礎石らしい 70㌢ほどの石が頭を出しているのをミステリーハンターが目にとめた「田んぼのなかで耕すにも大きな石があったんでは困るやろ」と話を聞くと「昔から石にはさわるな、そのままにしておけ、触ると良くないことが起こる」とのこと。これが「礎石ではないか」とハンター得意の妄想が広がり、今も「気になる」ポ

礎石が露出している…かも

イントになっている。

掘らないでも想像力豊かなハンターだけに、掘り出すと「毎回、何が出てくるか楽しみ」とワクワク。家族や知人にも「朝から夕方まで土を掘ってる」、「出てきた遺物のこと」、「夕食の時、その日の作業内容を」、「遺物や遺構の写真を見せる」、「歴史の証人だと自慢」、「発掘にハマった」など話は尽きないが、 家族や知人は唖然とすること暫しだ。

しかし、発掘時期は11月から翌年２月末までの日の入りが早い、冬に向かうサブい時期。年内はまだ小春日和もあるが、年明け１月・２月は寒さのピーク。薄氷を踏む日、雪がちらつく寒風、吹きさらしの日もある。「長靴、マスク、ヘルメット、ジャンパー、軍手にナイロン手袋、ネックウオーマー」、「銀行に入ると警戒される服装」、「格好より防寒第一」、「酒屋の前垂れ、ゴミ袋に毛布や座布団を入れた膝を守るクッション」、「最初にいただいたジャンパーは重宝」、「とにかくギャルやイケメンには見せられない」服装で寒さ対策に工夫した格好で臨む。

ただ掘るだけと思っていた作業も「えっこんなこともヤルの」ということも多い。一番予想していなかったのは、「文句いわない」排水ポンプで処理するものと思っていた水の扱い。「作業に入る前に溜まった水をスポンジで吸い出して取り除くこと」、雨の翌朝などはまず水を処理することが第一。ブルーシートに溜まった水や表面の水をスポンジで拭き取り、水がトレンチ内に入らないようシートを開いていく。「水の冷たさが指先にひびく」、「ぞうきんがけでなくスポンジがけや」、「タバコ吸わんと水吸って頂戴」など朝の定番作業となった。

しんどい作業だけど定番

土のう作りも重要な仕事。特に30次のトレンチは周囲にふた重ねに土のうを配置、軽く数えても800袋は下らない。「みんなが発掘している時、こちらは黙々と土のう作り、ワイルドだぜ」、「土はスコップ２杯半まで」。入れすぎると土のうを閉める時、なかなか結び目ができず、苦労する。テント設置も自前「ガンガン杭を打つには力がいる。ワイルドだろ」、写真撮影の足場設置も高さ３㍍近くあり、注意を要する。「もとの田に戻す前に砂や花崗土、消石灰を撒くこと」にもびっくり。また、柱穴・溝を示す白線ライン引きも初体験「石灰を水で薄める濃度、ブラシを前に逆

３人１組

に引いていく」など思いもよらなかった。

「ユンボが田のアマ土（耕作土）を最初に掻いて20㌢ほど下げ、次を下げる時から早くも柱穴や遺物が出てきた」、「重機のバケット１杯分はスコップ20杯ぐらいあるな」、「今の時代、建設現場でもスコップで作業はしてないやろ」とはいうものの、発掘現場の基本は人手。「遺物が出てきそうな時は、ガリかけで少しづつ下げていくんや」、「ただの土にしか見えないけれど、色が違う、色の違い、変化で見分けていく」、「黒ずんだ色、明るい茶色、言われてみれば形が見えるけど、五寸釘で線を引くまでわからない」、「同じものを見ていても見えているものが違うんだ」とうなづくことばかり。なかには「土の層いうてもわかりません、富裕層、シニア層ならわかるわ」と頭の容量が一杯いっぱいの人も。「楽しいけれど、かがんだ同じ体勢でやっていると腰、腕、膝がしんどい」、「午前、午後やるのはしんどいから半日で帰ってしまった」、「雨の後は土がこんなに重くて粘りがあるとは」、「腰と手首の負担がきついわ」、「両手に持つ土のうもなかなか重いで」など、身体は正直だ。

冬なのに日陰

高い位置から全景を

ガリ道具もさまざま

しかし、楽しみはやはり古代の瓦や土器の完成形などが出てくる時。「雨だれの溝には瓦がアチコチ、なかなか完成形はないけど」、「土器の皿や平瓦はあるが、軒瓦はみつけてないな」、「隣りの人が軒瓦を出した時は悔しかった」。また、「ガリッ、カチンと音がした時、専門員が走ってきたこともあった」、「おっかれながらピリピリしながらやったこともあったな」。それでも「小さい、破片のような遺物でも出てきた時はうれしい」。まさしく「ドキドキしながら掘る」ことになる。

撮影時には「瓦や土器の表面を小さなスポンジでパフのように軽くやさしく触ってしっとりと」、「ガリかけの後の土の粉をきれいに除くために掃除機を使うなん

て初めて」、「噴霧器でトレンチ表面をしっとりとさせる」、「晴天よりも曇りのほうが写真うつりがイイ」、「晴れていたら影をつくって撮影」など仕上げもバッチリ。

楽しい発掘も担当の文化財専門員から見れば、目が離せない。「トレンチ内をむやみに歩いたり、踏んだりしない」、「勝手に判断して作業したらダメ」、「遺物が見つかったら掘り上げずに声をかける」、「集中して掘り過ぎないこと」、「小物でもすぐに掘り出さない」、「土が付いていてもスリ落とさない」、「やさしくていねいに作業」、「作業は危険を伴う、安全第一」、「活動前にラジオ体操を」、「調査地以外の田畑には入らない」、「ゴミ、煙草を捨てるのはもってのほか」、「ある意味、発掘は破壊行為でもある、丁寧に」など指導する側も大変だっただろう。

これら貴重な作業体験を通して「専門分野は奥が深い」、「思い通りにいかず、辛抱がいる」、「とうてい、仕事にはできない」、「宝探しのようで楽しい」、「想像力の豊かさに感銘したが、話しになかなかついていけなかった」、「古代の一時期過ぎた後、ずっと田んぼだった所、田んぼのうちに掘らないと掘れない」、「何度もガリかけていく作業、大変なことだ」、「なかなか毎日参加することはできない」、「発掘前後の作業など地味だが大事」、「発掘には夢がある」、「体力、根気、そして熱心な気持ち」、「想像していた以上に細かい作業」、「地面の下には人々の生活があった」、「土に記憶されていることを正しく知る難しさ」と感じたことも数多い。「外でからだ動かしてると、なに食っても飲んでも美味い」４年間の作業はひとまず終わった。

イケメンカフェがオープン

小休憩時に欠かせないことがある。「昔はお茶、今はコーヒー」。発掘現場でオープンしたのは讃岐国府跡「まほろばカフェ」。マスターはおやじギャグ連発の水谷オーナー。オーナーが現場に居てる日は、旨いコーヒーが飲める「ラッキーな曜日」。みんなが作業に夢中になっている時、アレッと姿が見えなくなれば、紙コップにコーヒーを仕込んでいる。ブラックとミルク入り、砂糖はお好み次第。電気ポットを持ち込み、現場に着くや否やコンセントに接続、準備は万端。「今日は何人いてるな」と目配りピカイチ。遺物を収集するザルかごを盆代わりに運ぶ。おうちカフェでは味わえない旨さと温かさが、いただけると好評だ。「イケメンカフェ」（自称）至福のひとときが記憶に残る。（池）

あったかいなぁ

さぁどうぞ

発掘での出来事バレバレ

「よく、やるなぁ」と言われながら続けたボランティア。讃岐国府跡のトレンチでは瓦や土器が数多く出た。「なかなか軒瓦には当たらなかった」という人がほとんどだが、皿や器類の完成形には時々、出くわすことがある。監督にあたる文化財専門員からは「遺物が見つかったら掘り上げず声をかける」、「土が付いていてもスリ落とさない」など注意がある。ある時、小皿の完成形がトレンチから覗いた。「あっ、割れてないやつがある。ヤッター」。完成形には裏面に字が書いてあるものが時たまあると聞いている。墨書土器というやつだ。「完成形に近いものは触らない」と言われていた。その時、専門員が「文字は書いていましたか」と聞いてきた。思わず「書いてない」と答えてしまった。掘り上げて見てしまったことがバレバレだったのだ。（池）

2012/12/12

2012/12/12

2013/01/10

2013/01/30

発掘２（室内での遺物整理）

現地作業とは別に発掘で掘り出した遺物の整理作業が待っている。現場で発掘することしか頭になかったボランティアにとっては「えっ、こんなこともやるの」とびっくり。こんなこととは「遺物の水洗い」、「瓦や土器破片をくっつける」、「瓦の重さを量り種類分け」、「軒丸・平瓦などの模様の拓本とり」、「遺物に細筆で番号や種類を注記する」、「選び出した遺物の実測と図面化」、「現場のフィルムネガをスキャニングする」ことも。

ミステリーハンターがその作業に従事したのは2012年6月から8月までの3カ月。収蔵庫にある遺物の内、今まで讃岐国府跡発掘で掘り出した遺物コンテナすべてを再精査する。

整理をするには収蔵庫からコンテナの遺物を運び込まなければならない。扱ったコンテナ数は600箱。収蔵庫にはリフトがあり便利だが、作業場となる別館２階に運び入れるのに手こずった。２階への急な階段がそれだ。活動日は水・木・土曜日。人手が10人近くの時、「今日は人数が多いから、運び込んどこう」と１箱10㌔近く、重いコンテナは20㌔を超えるのを手渡しで連携プレーする。「量が多いのには参った」、「重いし細かいほこりのような砂が舞っていた」、「力のなさを思い知った」とはいうものの、ケガなく持ち込み・持ち出しが進んだ。

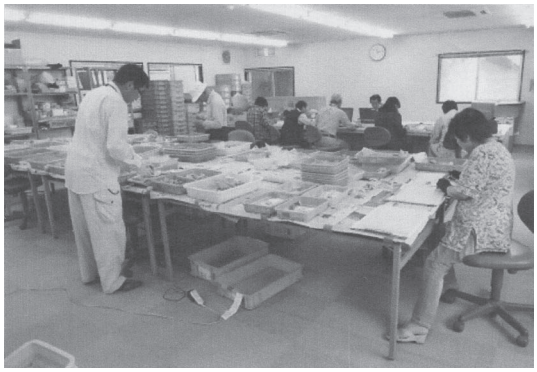
遺物を発掘次別に机上に広げ、瓦の重さ・種類を見る人、土器類を合わせていく人に分けて作業、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦はもちろん、有段、無段、桶巻き格子、縄目、一枚作り、スリ消し、究極は「隅数」までカウント、専門用語別にエクセル表に入力、「入力は目が疲れた」、「読み上げて声が涸れた」ことはあったものの、仕分けを進めた。

また、須恵器・土師器・瓦の接合は、「うまく結合できずイライラ」、「とても難しかった」、「ジグソーより難しい」、「指の先が荒れてしまった」「なんでこんな小さな破片もちゃんとせなあかんの、１時間たってもくっつかないわ」としんどい声も出たが、くっついた時の喜びはひとしお「ピタッと合った」、「破片がくっついた」、「小さな土器が合ってうれしい」など接合した時は、子供に戻った楽しさを感じていた。文化財専門員からは「元のコンテナにちゃんと戻す」、「モノを手でこすらない」、「文字のあとがないか注意を」、「熱意をもってやること」など注意点も。

このほか、研究者には貴重な資料となる軒丸瓦や軒平瓦は模様があり、素人眼でも関心を惹く。その瓦の拓本をとったことも。「和紙の切り方、霧吹きの仕方、タンポの墨付け、力の入れ方」など得手不得手それぞれだが、和紙に刷りあがった模様を眺める眼は玄人はだし。反面、「掘り出したモノすべて収蔵庫に保管しているが、模様のあるものや完成形のモノ以外の小さな破片など多くのモノは何の研究に使われるのか」、「小さい遺物はどう整理、使われるの」、「小さなものにも

すべて番号や区分けが印字されていてびっくりだけど、どう分析するの」などおびただしい数に圧倒された疑問も感じている。

一方、本館１階の部屋では遺物の「水洗い」作業を進めた。発掘で掘り出されたコンテナを持ち込み、土・泥を落とす作業。「水洗いと聞いていたけど、本当は温かめの湯で洗うんや」。数種類のハケを使い、３段階に分けた洗い方で仕上げていく。１段階２人セットで手がひたすら動く中、「単純な作業で肩が凝る」、「土器かと思ったら石や泥だった」、「あの時拾ったのが今ここへ来てるんだ」、「小さな破片は捨ててもいいんでは」、「コスリ過ぎたらダメ、ていねいに」と作業。座っている作業だけに口も良く動いた。「だまっていたら、余計に疲れる」、「趣味の話や旅行のこと」、「おしゃべりすることで他の人の様子がわかった」など。職員の話題もサカナにして「おもしろ、おかしい」雑談で時間が過ぎて行った。



時間を忘れて

お湯で手がホヤホヤ

まさしく、まさしく

「ボランティアにおもろい人がいるで」と、注目されっ放しの４年間。「地元府中で知らん人がいない」という知る人ぞ知る人。まち歩きには「国司・菅原道真」をイメージして、神主さんバリの白衣装でガイドする。発掘現場では口も動き、身体もよく動く。３人前ほどのスタミナでガガァと土を削り、土を運ぶ。みんなが休憩の時も身体と口が動いている「マグロなみに動きまわる」と、静かな時間が珍しいほど。この人は想像力豊かである。聞く人にとっては勉強になる内容が豊富。「なかなか、梶さんの話についていくのは、しんどい」ぐらい話が展開する。府中の史跡はもちろんながら、最近は城山（きやま）の古代山城にハマっている。景色を眺めれば古代から中世まで一挙にイメージが広がるらしい。「まさしく・・、まさしく・」カジゴロクは、今日もどこかで！。（池）

地形・水利作業

「なぜこの場所に国府があったのか」という思いを巡らす時がある。「山の稜線、山の形は今も昔も同じだっただろう」、「丘陵や谷筋、川の流れや海岸線は今も昔も同じか」など現地に立って風景を眺める時、頭のなかは想像力豊かになる。この夢想から醒めると、「車や電車が走り、山が削られ、田んぼがなくなり、家が建ち並び、どんどん景色は変わっている。こんな中では昔をイメージしにくい」のは当たり前。

過去を最もイメージしやすいのは、写真や地図や絵図だ。「菅原道真が綾川の風景を漢詩文だけでなく、絵に描いてればなぁ」、「銅鐸に風景画があればなぁ」と夢想するが、かなわぬ望み。大きな変化がなかっただろう時代の姿を求め、米軍撮影の写真を筆頭に、1954 年の国際航業撮影（旧 11 号道路建設前）、1962 年の航空写真など見ることがある。これら航空写真からは、土地の地割が見えてくる。いわゆる条理地割だが、素人眼には「別館 2 階に貼っている航空写真を見ても、ああこんな状態もあったな」というぐらい。地図は明治以降の陸軍陸地測量部の地図が役に立つ。明治 21 年測量地図はまだ JR 予讃線も開通していない。絵図になるともっと古くなり、江戸時代の阪出墾田図「文政 12 年、1829 年の坂出の風景、今から 200 年近く前の風景だ。その時代にタイムスリップした気持ちになる」。ほか鎌田共済会郷土博物館の阿野郡北・南絵図など。「こちらは場所や名前を知るにはグッド。絵はちょっとデフォルメされているな」という見方。

ところが専門家は「見るべきもの、考えるものが違う」。地形分析には現地の航空写真から条理地割を分析調査するとともに、地図や絵図からは道路や水路を見つけ出す。それらの資料と並行して、土地を実際に測量し、標高をチエック、等高線図から浮かび上がる姿で谷や微高地、旧河道など判断の材料とする。さらに現地を歩いて田んぼの水の出入りや用水の流れをチエックする。エリアのなかで古代から現代まで「どう人が生活してきたのか、水田を拡げてきたのか、海岸線はどう変化しているのか、それぞれの時代の地形を考えることで地域の歴史が見えてくる」という視点。

この地形測量現地調査にミステリーハンターが動員された。作業のメインは田の標高測量。2009 年度は府中町本村地区、2010 年度は加茂町、2011 年度が林田町など綾川右岸流域の河口部へ順次、範囲を広げていった。「測量は全く初めての体験」という人が大多数。測量器機（オートレベル）を覗く人、箱尺を持つ人、数値を記入する人、ポイントを探す人をグループとして、1 枚づつ田畑を測量していく。

「知識不足で当初は不安だった」、「初めは目的や意味がよくわからなかった」、「レベルを水平にすることに手間取った」、「箱尺の目盛りが見えなかった」、「今まで触ったこともなかった測量機械」、「初めての作業で仲間に手間をかけてしまった」

など苦労したことも多い。文化財専門員からは「地元の人にはきちんと挨拶すること」、「田畑内は歩かない、入らない」、「車や自転車には気を付けて」と注意も受けた。「夏の暑い中での作業だが、次第に自分たちだけでできるようになった」、「測量数値が合わなかった時もあった」、「㌢単位の地形の高低差をみていくんだ」、「知らない地区だけど歩くことで、なぜここに人が住んでいたのか、なんとなくわかるようになった」、「谷筋や尾根筋、微高地など他の地域でも観察するようになった」と平坦に見える土地でも起伏があり、微高地に昔の人が住んだことを知った。測量グループは道すがら神社、墓石、石碑、寺、史跡など目にとまった所を見て歩き、「グループ内で物知りの人がひとつひとつ説明してくれた」ことも記憶に残る。2012年度は現地測量から一転して、国土地理院の数値地図やフリーソフトのカシミール３Ｄなど利用してパソコン入力、データから10㌢単位の標高を手書きで都市計画図に記入する机上作業を進めた。

また、測量と並行して水利の調査では、2009年度に四手池用水の水路を探査すると共に、本村地区の田んぼごとの取排水状況を調査した。さらに2010年度から2011年度まで２カ年かけて加茂町、林田町の綾川右岸河川灌漑エリアの水利調査を進めた。水路の拡大状況や地名をみて、地域の開発状態、時期を調べようというもの。水田の水口（みなくち）と出口、水口も用水路と田渡し（あぜ越え）なのかをチエックした。「稲が青い時期から稲穂になる前までの時期、草むらに隠れた水口など探すのに手こずったことも」。調査は手旗を持つ２人、地図に記入する人、先行して場所を探す人で１グループ構成となって「炎天下に歩いて歩いて探した」、「畑や果樹地、休耕田、荒れ地に変わって出入りが分かりにくくなっていた」、「蛇がいるかいないかビクビク」、「田んぼのあぜを歩きまわるなんて子供の時以来」、「田に入らないよう細いあぜを歩いた」、「林田辺りは小さな濠があちこちあった」など暑い夏の屋外作業ではあったが、日常とは違った爽快感で満たされた。

「自動車で通り過ぎることはよくあ

ヤル時はヤル

この方がいないと現場が動かない。その人はタ・カ・ハ・シ・様。４年間の活動日、居てない日がないぐらい、皆を引っ張っていった。作業半日で引き上げる人が多い中、午前・午後と、仕舞いはキッチリとつけた。昼飯は旧国道沿いの中華食堂「龍鳳」。ランチ700円が定番。娘さんの知り合いだそうだ。義理がたい人でもある。飲み会にも必ず顔をだす。「前の晩飲んでも翌日は出る、行く時は行く」と現場では深い柱穴掘りによく遭遇する。カメラ撮影の足場組も高い所で作業。この方、現場だけでもない。順道帳にみえる「大道（だいどう）」地名に注目、「南海道の痕跡はないか」と現地を歩き、「讃岐国府周辺における大道地名と南海道」と題した成果報告を「研究紀要８」に提出した。第30次第３トレンチで軒丸瓦（白鳳時代か）に出会った「ヤル時はヤル」人でもある。（池）

るが、実際に歩いてみると、全く違う風景、景色になる」、「林田地区は条理がよく残って広々とした所、水の流れを調べることが、どう関係するのかまだもうひとつ」、「水は高い所から低い所へ流れるから当然と言えば当然の流れ」、「どんどん田んぼが店舗や家、道に変わっている。なにをどう残すのか」。歩く作業は、身体で感じることが多かった。

かっこイイなぁ

地名・資料作業

住んでいる土地の呼び名は、言い得てピタリという地形を表す場所もあれば、なんでこんな呼び名が付いているんだという場所もある。大きな屋敷があった所は何々ヤシキ、寺の西側はテラニシ、倉の前はクラマエ、漢字表記だとイメージが固定するが、音読みだといろいろ解釈も変わってくる。

昔から呼ばれている地名を住んでいる人たちに直接聞いていこうと、地名聞き取り調査が実施された。2009年6月から10月末まで府中町本村地区、2010年5月から10月末まで加茂町で実施した。現地を歩いて地元の人から小字や通称地名を聞き取るが、「何々さんのとこ」、とか「何々さんの田」などがほとんど。幸いなことに府中町本村地区では明治・大正時代に採取されている地名、加茂地区は地元研究家の収集した地名が資料で残っており、これらを補完する形となった。

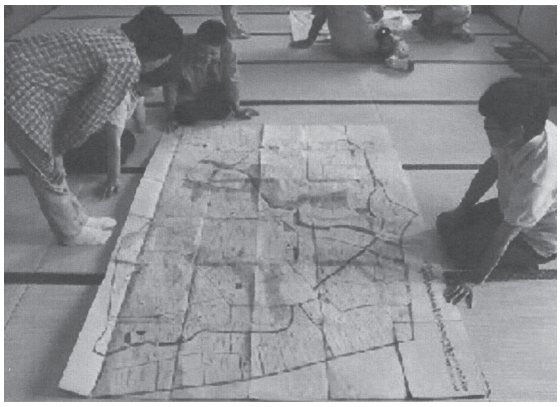
「住所以外に地名があるとは初めて知った」、「手掛かりを持った高齢者が少なくなっていくなか、もう20年早くこんな活動をしていれば」、「地名には昔からのい

われが残っているのかな」、「若い人はほとんど関心がないようだ」、「年配者の知っていることが次の若い世代に伝わるかどうか」、「話をした時、相手の方も楽しんでいただけたような気がした」、「絵にかいたような地道な作業」となったが、新しいデータは少なかった。

地名聞き取り作業と共に、檀那寺と石造物調査も併せて実施した。府中町国府域の檀那寺構成状況を聞き取るなか「寺の動きは意外と地元の古い時代の動きに重ね合わさった」と古くは崇徳上皇時代から讃岐国府廃絶後の府中町に移住・定住した時代まで歴史を考えることができ、「お寺さんは現在住んでいる人にとっても関心ある内容、自分たちの過去が見えることがある」と興味深い内容となった。石造物は綾川中･下流域まで鎌倉時代から室町まで遡る遺物 148 点をデータ化、「だれが建立したか」を考えるヒントとなった。

一方、地名調査を進める際に、文献資料として大きな役割を担ったのが、坂出市役所の出先出張所に保管されていた江戸期の田畑順道帳（検地帳）、明治期の壬申地券地引絵図（明治８年頃）、地租改正地引絵図だ。現在使用されている法務局の公図・旧公図と遡り照らし合わせていくと、田の動きが見えてくる。当時の年貢は今の税金。その年貢は米の収穫が基準、米を作る田んぼの管理が一番肝心な要だった。その田んぼ１枚づつに付けられた名前が時代の変遷を考える上で手掛かりとなる。

マスクとデジカメ



拡げてびっくり

ミステリーハンターが文化財専門員と一緒に 2009 年から府中町、2010 年加茂町、2011 年林田町の各出張所に出向き、資料を分析した。専門員の指導のもと、１枚１枚慎重にめくり、デジタルカメラで撮影、分析・解読に着手した。「ホコリも多くてまいった。劣化も激しく扱いに神経を使った」、「ボロボロになっている個所もあり、取り扱うのに苦労した」、「古いホコリを吸い込みそうでマスクで作業した」、「くずした字もあり、古文書は読みにくかった」と初めての作業に手こずった。

さらにデジタルカメラのコピー資料をもとに、順道帳から古い当時の地名

を抜き出し解読、また検地帳と地引絵図を照らし合わせて公図に移し、都市計画図に地点をインプット作業した。江戸期の検地帳は「阿野郡南府中村田畑順道帳」（文化２年・1805 年）や林田村では「阿野郡北林田村順道帳」（元文５年・1740 年）など多数の資料が保存されており、「よくぞ残して置いていただいた。すごいな」、「古い資料があるところにはあるんだ」、「こんな文書に触れるのは初めて、新鮮だった」、「資料が残っていてそれを閲覧、利用できることに感動」、「ありがとうの一言です」、「タイムスリップした気持ちになった」、「昔の人は文字が上手いな」、「地域に残る古文書や資料はしっかりと保存しなければ」など目にした驚きと感想を話す。

また、「1 冊の帳面に赤字や黒字が書き入れてあり、最初に作成した文書を大切にその都度使用していた緻密な仕事ぶりが覗える」、「今に至ってその当時のことを知る手掛かりになるとは」と消え去った当時の地名に思いを馳せた。田んぼの地名とともに収穫の等級を示す上々田、上田や下田なども記載されており、この色分けを実施して地形の参考にした。林田町の海岸部では時代とともに埋め立て開発されていく「新興や新開」地名をもとに新田開発の姿を浮かび上がらせた。府中町域では「大道」地名を抜き出して南海道に結び付ける作業も進んだ。

読めるかなぁ

専門員からは「資料は元あった位置にそのまま置くこと」、「内容は個人のプライバシーもあり、取り扱い注意すること」、「むやみに物を動かさないこと」、「十分に注意して扱うこと」など古文書の基本的な扱い方を指導された。

作業を通じて「古いというだけで捨てないで、いつかは役に立つ、大切に扱うことが大事」、「火災や災害も無事生き残ってきた資料がここにあるとは」の声とともに「残っていた資料があまり完璧とはいえない場所に保管されていた所もあったと思うが、それが逆に良かったのかどうか」と今後の資料保管を心配する声も聞かれた。

額坂で長老に聞く

古いひと

地名聞き取りで地元を歩くことがある。「古いひとに古い話を聞いて古いことがわかった」。もちろん今、住んでいる人にお会いするのだから「古いといっても、どれほどの古さなのか」は話をしていただける人の年齢に依る。ところが人は「自分が生まれた年より前のことはすべて古い」というのが普通の感覚。聞き手が話する人より年下（若い）の場合、話する人は「古い人」になる。人は孫が生まれたら「おじいちゃん、おばあちゃん」になる。孫にとっては、生まれたその時から既におじいちゃん、おばあちゃんなのである。孫が大きくなり、話を聞こうという時、古い人がいないのは世の常。「20年前に聞いておけばよかった」というが、その時は生活に追われ「それどころではなかったのである」。若い人もいつかは古い人になる。だから学ぶことは大事なのである。（池）

古墳作業

「古墳の測量に参加した」、「古墳の内に入ってメジャで測っている」とミステリーハンターが日頃経験できない作業に携わったのは2012年9月から11月までの3カ月間。場所は綾北平野の坂出市加茂町。加茂古墳群のなかでもひときわ巨大な横穴式石室を持つ穴薬師（綾織塚）古墳。「いまだに測量調査されていない古墳があるなんて」とそんな事実にびっくり。埋蔵センターから約2㌔北北東に位置する烏帽子山（標高263㍍）の南斜面、標高78㍍の高さに築かれている。かって烏帽子山は、えぼし状の形状で、山頂の巨石群を中心に石器類、弥生土器など多くの遺物が散布していたことでも知られていたが、戦後から今も続く採石事業によりその形状は様変わり。山頂の遺跡は、すべて採石で跡かたもなくなった。

その中腹に位置する古墳調査は、麓の鴻ノ池地点のポイントを基準に石室までの標高測量調査からスタートした。古墳までの急な登り坂は「器機の水平を取るのに手間取った」と2日かかった。石室は、後の確認調査で明らかになったデータによると、南北32㍍、東西29㍍の方墳。全長13.2㍍、玄室長さ5.5㍍、床面積14平方㍍（香川県内第8番目）。築造時期は飛鳥時代の初め、600年代の前半（7世紀第1四半期）、聖徳太子の時代らしい。

「綾北平野の加茂・醍醐古墳群、新宮古墳などは古墳時代の終わり（6世紀後半）でなく、飛鳥時代に複数の有力者がこの地域に入って水田など開発を進めるなかで築かれたことが想定できる。古墳が造られなくなる飛鳥時代後半に、これらの有力者達が城山の築城、開法寺や鴨廃寺、醍醐寺など古代寺院にも関わっており、中央政権と強いつながりを持った有力者が居たことが、この地域に讃岐国府が置かれた要因の一つかも」（信里芳紀文化財専門員）と分析する。

綾織塚は内部に薬師像を設置している加茂地区の信仰の場でもある。「地域の人

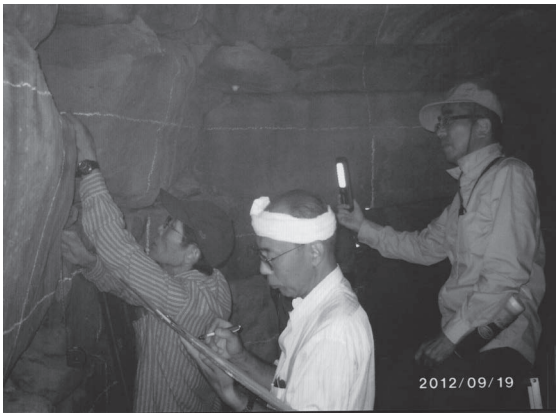
たちが大切に保存しているんだ」、「お不動さんや神社になっている所もあるね」、「自分の墓同様、きれいにしてあげたい」など「よくぞ今まで残ってきた、すごい」と古墳でコーフンした感想もでる。

９月の残暑、木漏れ日のなか、調査には様々な道具が使われた。測量器材、携帯ライト、メジャ、画板、ピンポール、草刈り機、刈りばさみ、脚立など。特に必需品は「蚊取り線香」。「ヤブ蚊にさされて大変だった」と現場に着くとまずは６個所ほどに蚊取り線香を置いていく。頭に携帯ライトを装着、１㍉方眼紙を持って３人１組、内部の石積みを測っていく。

チョークで引かれたラインを基準に「方眼紙の目盛りが見えにくく、首を上向きにする姿勢もきつく大変」、「正面から見る石積み平面とその重なりあった奥行方向も見ないと」、「実物の石と手前の図面、見比べながらでもつい間違いそうになる」、「実際の石の実感を」、「線香の煙でノドがかれる」など狭い内での作業に苦労した。また墳丘測量では、下草、雑木の刈り込みを進め、測量ポイントを決めていく。「必要な所だけ刈り込みを」、「測量ポイントを踏まないよう」、「モノを動かさない」、「目盛りは正確に」、「安全に」など注意点も。

周辺の古墳も時折り見学しながら、「イノシシも走っていた」現場作業は順調に進み、「石をひとつづつ測っていく作業が古墳の図面になる、何気なく見ていたけど、これからは見る目が変わってくる」、「大きさでその権力者の規模が比較できる」、「築造の技術や技術者のこと、造るがわの苦労が知れる」、「なぜこの場所に」など観察眼も変化した。綾織塚途中の山登り道からは讃岐国府跡が南に見え、西に城山、眼下に綾川、そして瀬戸内、遙か遠くには剣山、景色からも古代をイメージするなか「古墳は好きで数多く訪ねたけど、石室内を測量している自分は想像できなかった」と貴重な体験が完了した。

さぁやるぞ



３人１組で作業

1枚の写真が語る

開法寺塔跡や段丘崖に迫りつつある南エリアでの第29次・30次の発掘調査地。この田んぼの一角に「讃岐国庁跡碑」がある。碑銘文には大正11年12月（1922年）と記されている。碑の落成記念式典は大正15年4月（1926年）。今から87年前のこと。記念式典の席上、「讃岐国府遺跡考」と題した講演をした人がいる。岡田唯吉（鎌田共済会調査部主事）だ。岡田はその話の内容を中心に昭和17年（1942年）に小冊子として鎌田共済会から発行した。冊子のなかに昭和2年5月18日（1927年）撮影の「府中村字本村国庁跡全景」という写真が載っている。辺り一面田んぼのなか、正面に烏帽子山が美しいえぼうし姿を残し、写真右隅には白く輝く記念碑、左隅は鼓ケ岡の稜線が写っている。碑はこの田んぼの中央に置きたかったようだが、田仕事をするには真ん中ではジャマになるため、里道の脇、鼓ケ丘の中心から少しズラした位置に城山を仰ぎ、建てられた。藤井亀三郎府中村長以下十有一人が建立、碑裏面に名前が刻まれている。この写真中央に位置する田んぼが「府跡ナリ」と説明されている。当時前からこのエリアでは地表面などに古代瓦が散布しており、地名と共に特徴あるエリアだったようだ。明治から大正期にかけては、地方ではまだ「発掘」という概念は薄く、大正11年、濱田耕作（後の京都帝大総長）の「通論考古学」がようやく考古学概論として発掘作業を位置づけたばかり。田んぼの耕作以外掘られたことのない「鍬考古学」の時代から時を経て今回、初めて「開法寺の東」という地点で29次・30次の発掘作業が地権者の理解・協力・承諾を得て行われたのだ。小冊子に掲載されている86年前の写真を見て、1200年前の風景を見るには無理があるだろうが、山の稜線は変わっていないと思いながら「何年か先には一面芝生の暖かい日差しの下、寝転がって昼寝してるだろう」と1枚の写真でタイムトラベルする姿を想像する。（池）

開法寺塔跡から見る

城山明神原を仰ぐ

ボランティア主な活動行事(2009年4月～2013年3月)

2009年

募集期間（第1期・31人登録）	3月30日～4月20日
第1回研修会（調査活動計画）	5月24日・25日
府中・加茂の地籍図・府中本村地区地名調査開始	6月～
四手池用水調査開始	7月7日～
第2回研修会（調査状況報告など）	7月4日・6日
第3回研修会（丸亀市津森位遺跡見学など）	8月22日・24日
南海道（研究活動の進め方）	9月5日・7日
第4回研修会（中間報告、発掘ポイント）	9月13日・14日
南海道（府中町綾坂周辺）	9月25日
南海道（国分寺町周辺）	10月1日
水のフェステバル（坂出市府中湖）	10月4日
第5回研修会（発掘ポイント、他地域状況）	10月9日・10日
南海道（高松市三谷町周辺）	10月15日
南海道（三木町平木周辺）	10月21日
第6回研修会（発掘調査の選定など）	11月13日
南海道（善通寺）	11月14日
南海道（大川町）	11月21日
第27次発掘開始	12月4日

2010年

第27次発掘調査現地説明会	1月16日（60人）
県庁パネル展示	1月25日～29日
第27次発掘調査現地説明会	2月21日（138人）
讃岐国府跡探索事業報告会（坂出市万葉会館）	3月13日（105人）
研修旅行（奈良平城宮跡、纒向遺跡など）	3月17日
第7回研修会（讃岐国府と菅原道真、活動まとめ）	3月27日
第1回研修会（2010年度の調査活動）	5月8日
加茂町地区測量開始	6月～
第2回研修会　（調査状況、宗吉瓦窯跡見学）	6月26日
第3回研修会（引田・大坂峠の南海道現地研修）	8月2日
研修旅行（出雲国府跡など）	9月8日
第4回研修会（調査状況、県外国府の調査例）	9月18日
水のフェステバル（坂出市府中湖）	10月3日

第５回研修会（調査状況、城山城跡）　11 月８日
第 28 次発掘開始　11 月９日
第６回研修会（調査状況、今後の活動）　12 月 18 日

まち歩きでお馴染み

紹介される面々

研修で配布された図書や資料についてのメモ

配布資料は後で思い出して再読、復習できてよかった。書籍は読むことでこの調査の意義が理解できた。講習会は先生方の意見や個性があり、幅広くとらえることができ、楽しかった。専門用語に戸惑いましたが段々、わかるようになってきた。いろんな立場や見方があって歴史は面白いなぁと改めて思いました。

専門員の話を聞くことができ大変幸福でした。調査して明らかになったことをいかに構築していくかが興味深く聞けた。
今やっている作業の位置付けに役に立つ。

書籍は全方位からの考察ができ、「なるほど」の世界でした。その都度の配布資料は、後日まとめて再編集していただければありがたい

国府の発掘調査が全国でも比較的新しい事業であることが判り、驚きを感じた。考古学の一端に携わった者となれるよう、資料をじっくり勉強し、博識メンバーに少しでも近づけるようになり、痕跡から人間の過去を解明する楽しみをもてるようにしたい。

配布された本は非常に参考になります。まち歩きの時､地域の人に尋ねられた時、すぐ読み返し、整理して話することとしている。この本をマスターすると自分の弱い点、強い点が明らかになり、次のステップに発展するのでは。

私の知識のバイブルとして何回か読みなおしている。講座資料も大変参考になり、知識が深まっている。

２冊の図書を最初に読んで活動できたことはグッドタイミングだった。執筆した人の名前がわかっており、その人に直接聞けることもよい。研究紀要８の讃岐国府を考えるは、何度も読み返し、イメージづくりに役に立っている。

先輩ボランティアがまち歩き案内の原稿のネタはすべてこの２冊を読み込んで作ったと言われたのをきっかけに何度も読み直した。個人の地域活動や仲間の会合時に府中の歴史を話す機会もあり、これらをまとめて話させていただいている。

ぼちぼち読もうと思っている。いつも知らなかったことが聞け、よかった。

大変役に立っており、全体がよく分かり、夫々の事象も詳しく書かれており重宝している。

北条池は林田、加茂、西ノ庄の水。農民の水争いが多く、高松藩が何度も調停に入っている。府中の四手池は高低差のない地形を４㌔も流れている。地形・地名調査などで土地一筆ごとに等級に分かれ、年貢を納めるのに大変なことが解りました。

毎月１回程度の研修会を開いてくれたのがよかった。南海道や宗吉瓦窯跡など見学も多く、ありがたかった。今年は機会が少なく残念。調査の成果が目に見える形で示されると励みになる。

国府探索や勉強に欠かせない。ガイド本として大事に活用する。配布資料はその時々に合わせてタイムリーに勉強になります。

讃岐国府の位置についての本には、南海流浪記、菅家文草 (262) , 菅家文草（210）など重要な手掛かりがある 。

資料配布は専門知識の取得に非常に参考になった。私も研究テーマを見つけ、ライフワークとして研究結果を文書で残したい。

活動に参加するまでは全く関心なく無知でした。参加することで非常に興味が出てきて楽しくなっている。図書館に行っても古代の本が目に付き、考え方が変

わってきた。知人に古代について話すことが楽しい。

全部眼を通したが勉強不足が目立つのみで、必要と思われる都度、利用させてもらっている。今後の新しい資料配布に期待する。

一人よがりにならないようディスカッションやればどうか。人の話を聞くのが私の知識の充実につながる。

頂いた資料はなんとたっぷりあることでしょう。専門的な部分も多い半面、だれでも理解できるよう作られている。たくさんの資料を準備していただき、何時の間に作るのでしょうか。過去はスピードをあげて変化しつつある。それにちょっと待ったをかけ、これからも思いがけない大発見のニュースが発信されることを期待します。

何も知らないままに参加したが初めに研修で教えていただいたのがよかった。調査についても何のために行うのか説明があったのでやりがいがあった。

2011 年

第７回研修会（調査成果）	１月 22 日
第 28 次発掘調査現地説明会	１月 23 日（200 人）
県庁パネル展示	２月 21 日～ 25 日
第８回研修会（全国の最新情報）	２月 26 日
讃岐国府跡探索事業報告会（坂出市万葉会館）	３月 12 日
研修旅行（藤原京、飛鳥）	３月 16 日
第９回研修会（活動まとめ、活動予定）	３月 26 日
打ち合わせ（活動計画など）	４月 20 日・23 日
林田出張所資料調査	５月～
林田町地形測量調査	５月～
第１回研修会	５月 21 日
まち歩き（国府周辺）	５月 22 日
募集期間（第２期・13 人登録）	６月７日～ 21 日
第２回研修会	６月 25 日
新人研修（活動説明、国府跡まち歩き）	７月９日
南海道（引田～白鳥）	７月 17 日
第３回研修会（坂出市郷土資料館）	７月 30 日

研修旅行（安土城考古博物館、近江国府跡）	9月7日
南海道（丹生～三本松）	9月18日
水のフェステバル	10月1日
南海道（丹生～大川町）	10月2日
まち歩き（国府周辺）	10月9日
南海道（綾坂～額坂）	10月12日
第4回研修会（大橋泰夫教授講義）	10月29日
第29次発掘調査開始	11月14日
忘年会（坂出柳屋）	12月10日

坂出市郷土資料館で

安土城考古博物館で

見学研修・旅行についてのメモ

観光旅行で行くのと違い、専門家が説明してくれ、普通では見られないところを案内していただき勉強になった。

南海道現地調査は自分一人では決してできなかっただろう。資料も充実しており、よく調べていると感心した。

毎回楽しみで、現地の専門員の話は刺激になった。調査レジュメの作成など尽力された世話方に礼をいいたい。

3次元の古代を夢想しながら現在の風景を重ね合わせ、連綿と続く長い歴史に感動した。その都度先生方に同行していただき、地元学芸員にガイドしていただいたことなど印象に残っている。

地域住民や行政機関が国府をどれだけ意識しているのか、疑問を持った。地域住民の深い理解を得て、発見後の維持管理ができる体制つくりの大切さを感じた。

日帰りの研修旅行は我々を考える考古学者の気分にしてくれて違った世界を見せていただいた。専門員の先生方が年休で参加、資料集め、現地案内の世話、ガイドなどやっていただき感謝です。今後、解散しても実施できるよう希望するものです。

興味深い地域に行けたのはよかった。センターとして行くので現地の専門の方々に説明していただけるのはよかった。

それぞれの行政の専門員が説明していただけたことはよかった。行政マン同士の横のつながりを各施設が対応できる運営を望みたい。広報啓発活動の重要性を認識していただきたい。

事前調査の資料が揃えられ現地でも先生方の説明を受けられ本当によかった。

近江国府は日本の中心地として長く続いた地方としての重み、倉吉は遺物の複雑性や古い人の知恵、造形美、遺跡管理の難しさなど感じた。

各地区の国府跡は実状況を身体で味わうことができ、讃岐国府を想像するのに大変役に立った。出雲は東側に川があること、現地の人の話で初めに有力視されていた場所とは異なる所が国府跡であったなど各地区の話は興味あった。

国が出来て全国で同じ決めごとを行うのに漢字や紙が重要な働きをする。菅原道真さんの詩からも庶民の生活や考えがわかる。千年前の奈良・平安時代が身近に感じられるようになった。

各地の国庁跡を訪れることができたことは讃岐の国庁を想定するうえで大いに参考になった。日程についてはアンケートをとるなど調整したらよかった。

国府跡として保存されている近江や伯耆国府は跡地を公有し、一部建物を復元保存している。讃岐国府跡が確定すれば、県や市が用地を購入し、坂出市の遺跡公園のような形で整備保存して残して欲しい。

現地の専門員から丁寧な説明があり、個人的に行ったのではとても理解できない所まで説明がありよかった。南海道を歩く研修も昔に思いを馳せながらとてもよかった。

バスでの日帰りツアー、学芸員の説明がよかった。

倉吉では先方の教育委員会が四隅にポールを立てて予想していることに感動した。

どの研修会も専門員の方による丁寧な説明、現地案内をいただき、自分で行ったのでは味わえない内容の濃いものだった。ありがとうございました。

他県の国府跡を見学できたのがよかった。出雲国府では、あまり条件の良くない土地に国府が置かれていたことに驚くとともに讃岐国府も綾川に非常に近い場所であっても不思議でないことがわかった。国府についてのイメージが広がった。

倉吉市へ旅行

佐藤さんがいる！柳屋で

2012 年

第 29 次発掘調査現地説明会	1 月 21 日（150 人）
讃岐国府跡探索事業報告会（坂出市ふれあい会館）	3 月 10 日（150 人）
事業報告会その２（高松市三谷町三谷コミセン）	3 月 17 日（80 人）
研修旅行（倉吉市伯耆国府跡）	3 月 22 日
第５回研修会（活動予定、古代南海道と讃岐国府）	3 月 24 日
第１回研修会（活動計画）	4 月 18 日・21 日
資料整理作業開始	5 月～
南海道（大日峠）	5 月 20 日
南海道（古墳、宗吉瓦窯跡見学）	6 月 16 日
第２回研修会（活動報告、国府跡遺構変遷）	7 月 7 日
南海道（大墓古墳、道音寺など）	7 月 8 日
暑気払い（ホテルサンルート宇多津）	7 月 14 日
第３回研修会（活動報告、鼓岡文庫見学）	8 月 18 日
姫織塚古墳調査開始（坂出市加茂町）	9 月 12 日
研修旅行（総社市鬼ノ城、作山古墳、国分寺）	9 月 16 日
水のフェステバル（坂出市府中湖）	10 月 6 日
国府サミット（坂出市民ふれあい会館）	10 月 6 日
第４回研修会（活動報告、発掘調査）	10 月 20 日
南海道（大野原、豊中）	10 月 21 日
発掘調査開始	11 月 5 日
第５回研修会（状況報告）	12 月 1 日
加茂町報告会	12 月 15 日（30 人）

総社市吉備路

大きくなったら話してね

まち歩き研修についてのメモ

歩きながら古代を想い、同じ道でも新しい発見があった。参加者との交流が少なかったが、例えば本日の感想はどうでしたかと聞いてもよかったかな。コースができた意義は高い。

活動された人は大変だったと思う。長く続けているとここまで成果を挙げれるのかと感心し、敬服している。

南海道が認知され、時代が異なるとはいえ、四国のへんろ道との関係について全国へ PR できるようになればよい。その土地に惚れ、愛着心を持つ人が増えるように活発な活動になって欲しい。

坂出市の古のロマンのまちさかいでと国府跡、城山、大道の３コースを合わせ、参加年齢、季節などマッチしたコースを選定し、国府とまちづくりに貢献できるよう展開したい。林田町の中河原二十会の皆さんが発掘へんろにバスで見学してくれたのが一番の収穫だった。

ガイドは始まって２年、貴重なので記録に残したい。

参加した人の質問に簡単に答えられるようになることの大変さが身にしみた。ボランティアの中からガイドやサポートができる人がでてくるよう目的をもった指導を進めれば。

３コースの方々のガイド内容や仕方を参考にさせていただき、家族や友人、地域の活動の場で話す機会をつくりたい。

ガイドやサポーターをされた皆さんは熱心によく勉強されており、立派な活動成果を挙げられていることに感服している。

城山コースはゴルフ場に入って城門を見れば最高なのですが、入れない状態では時間・距離・見る所はよかったと思う。説明も味わいがあり、いいと思う。

どの観光地に行っても自分たちの住んでいる地域の歴史や景観、食べ物をアピールして人々にきていただけるよう活動を行っている。私の住んでいる所も歴史上の人物や場所があり、人々の目に触れて考えていただくようになったらいい。今日の私たちの生活も先人から後世の人々への中継ぎだと思う。

ガイドとなった皆さんの頑張り、努力にただ感動。これからもこの活動を続けて欲しい。

本村地区の土地を提供してくださった方々のご発展をご祈念申し上げます。屈原の楚辞に、和して芳きを致せ（和到芳）という詩文があります。仲良くしてお互いに伸びていきましょうという意味です。今後の府中町の姿をずっと見守らせていただきたく思っています。

我々が現場で知った知識を説明伝承することにより、多くのひとに特に小・中学生に関心を持ってもらいたい。専門用語を多用せず、わかる言葉で説明するよう心がけている。現代は突然存在したのでなく古代からの延長線上に存在しているということをガイドで認識した。

多忙な中、資料作成など大変だったと思います。多数の参加があり、熱心に話を聞いておられ、満足できた成果になったと思います。国府など知ってもらうために定期的に県内の皆様に発信すればよいと思います。

順道帳を調べ、そこに印された地名から南海道を推定する作業は楽しかった。それをまとめた取り組みには感動した。条理の遺構から河内駅を推論した説明にもストンと落ちるものがあった。

関係者以外は３コースについて理解が不十分ではないかと思う。ミステリーハンターは国府庁跡発掘と思っている人が多いのではないか。城山城跡の遺跡は素晴らしいが、一般人は知る人が少ないのではないか。もう少し PR しては。

私の母は毎日、日の出に東に向いて手を合わせて今日も穏やかに過ごさせてくださいと祈っていました。細やかな心づかいが大切だなと思います。2012 年１月の柱穴跡の発見を目のあたりにし、その感動は今も脳裏に焼き付いて忘れられません。できうれば一大パノラマを描き得ればと夢の実現を期待しています。

ボランティアに参加している人以外にも国府などに興味のある人がたくさんいることが分かった。地元の歴史を伝えていこうという強い思いに感心した。

2013 年

新年会（龍鳳）	1 月 26 日
第 6 回研修会（発掘報告）	2 月 2 日
マスコミ各紙讃岐国府確定報道	2 月 7 日
第 30 次発掘調査現場見学会	2 月 9 日（178 人）
第 30 次発掘調査現場見学会	2 月 10 日（742 人）
府中小学校５年生見学	2 月 13 日（40 人）
府中小学校３年・４年・６年生見学	2 月 14 日（110 人）
浜田恵造香川県知事発掘調査現場見学	2 月 16 日
シンポジウム「讃岐国の幕開け」（坂出市民ふれあい会館）	2 月 17 日（180 人）
わんちゃん「きな子」発掘調査現場見学	2 月 21 日
シンポジウム「讃岐国の幕開け」（香川県庁ホール）	3 月 17 日
研修旅行（奈良元興寺、橿原考古学研究所など）	3 月 21 日

鬼ノ城の復元地にて

成果もあがり全員笑顔

当たり前でないことが！

2013年2月10日午後1時からの第30次発掘調査現地説明会。「讃岐国府の中枢施設ゾーン見つかる」の報道は、県内外から1000人を超える人を集めた。「ようやく見つかりましたか、子供のころから言われていた所で」、「えっ、こんな広々とした所なの」、「埋蔵センターのすぐ近くなんや」と話かけてきた。JRのマリンライナーが150㍍程東を走る景色のなか、菅原道真も赴任した古代県庁をイメージ、「なかなかイイ景色の所ですね」と地元にいては当たり前と感じていた風景が別のものに見えた。古代の瓦や柱穴跡は、集まった人にホンの一瞬、日常を離れ「ポッとしたイメージする時間」を与えたかも知れない。「まずは建物跡、柱穴跡やけど、これで木簡や墨書土器など字が書いてあるのが出れば、また一歩進みますね」。次々と話題づくりも欠かせない。「JRの車窓から見える所に讃岐国府跡の看板を立てれば」という声もあった。2月16日には浜田恵造県知事が訪れ、ボランティアに感謝のことばを述べた。2月21日には香川県広報誌特派員のわんちゃん「きな子」が梶国司とともに現れ、「ここ掘れワンワン」と興奮、「未来に残したいワン」と話した。（池）

トレンチの周囲を四重五重

浜田県知事も見学

国司ときな子ご対面

讃岐国府跡探索事業ボランティア調査員（アイウエオ順）

平成 21 年度

安藤みどり	飯沼一広	磯村衛治	犬飼直美	垣本保	梶英憲
金倉留美子	葛原知子	甲野博	小西智都子	佐々木宏	住谷善慎
十河裕之	高橋利秋	高橋徳	竹内博文	竹嶋真理	田村源一
中川俊彦	仁井名詳浩	野口美智子	長谷川宏	福家壽子	藤田和康
古田博子	松尾伸	真鍋正彦	万野年紀	水谷正裕	宮本義彦
横田寛					

平成 22 年度

安藤みどり	磯村衛治	犬飼直美	垣本保	梶英憲	金倉修
金倉留美子	葛原知子	甲野博	小西智都子	佐々木宏	住谷善慎
十河裕之	高橋利秋	高橋徳	竹内博文	竹嶋真理	田村源一
野口美智子	長谷川宏	藤田和康	古田博子	松尾伸	宮本義彦

平成 23 年度

安達孝美	安藤みどり	池浦健一	磯村衛治	犬飼直美	岩崎良則
垣本保	梶英憲	金倉修	金倉留美子	葛原知子	久保正志
合田武勝	甲野博	小西智都子	齋藤茂	坂下周市	佐々木宏
佐々木方彦	住谷善慎	十河裕之	高橋利秋	高橋徳	竹内博文
竹嶋真理	田村源一	中島君子	野口美智子	長谷川宏	藤田和康
古市政春	古田博子	松尾伸	水谷耕造	宮本義彦	森野雅雄
和田昭	渡辺政弘				

平成 24 年度

安藤みどり	池浦健一	磯村衛治	犬飼直美	岩崎民子	岩崎良則
垣本保	梶英憲	金倉修	金倉留美子	葛原知子	久保正志
合田武勝	甲野博	小西智都子	齋藤茂	坂下周市	坂本公男
佐々木宏	佐々木方彦	住谷善慎	十河裕之	高橋利秋	高橋徳
竹嶋真理	田村源一	中島君子	野口美智子	長谷川宏	藤岡貴
藤田和康	古市政春	古田博子	水谷耕造	宮本義彦	森野雅雄
和田昭					

讃岐国府跡探索事業ボランティア活動編集委員

安藤みどり	池浦健一	坂下周市	高橋利秋	藤田和康	水谷耕造

編集後記

４年間のボランティア作業がとりあえず終わった。「肌で感じ、身体で考える」場所をいただき、奈良・平安の古代イメージに浸った。知らないと何でもないことが、知れば知るほど心を浮き立たせる。「過去に思いを馳せる」ことは、日常の世界で「それどころじゃないよ」といわれるのが世の常。でもその過去を知ることは、今を知ることにつながる。過去を想って、未来を感じるイメージする力がある限り、忘れることはない。「飲むのも食うのも何でも旨い」日々は限られるが、ボランティアは新たなものを得ていく楽しさを学んだ。これからは、この学んだことを情熱を持って話し、伝えていく作業が待っている。事業に関わったすべての方々、行政、地権者、地元そして関心を寄せていただいた方々に感謝します。ありがとうございました。（池浦）。

讃岐国府ミステリーハンターの参加活動

讃岐国府跡探索事業ボランティア調査員

（2009 年度～ 2012 年度）

平成 25 年 3 月 31 日発行

編集　讃岐国府跡探索事業ボランティア活動編集委員

発行　香川県埋蔵文化財センター

〒 762-0024　香川県坂出市府中町南谷 5001 － 4

電話（0877）48 － 2191（代表）